
「カァディスからの手紙」 (110)

2006年6月16日

ウェブ・メールでご覧の皆様へ (其の他の方は飛ばして下さい)

109号はどうやら無事に届いたようですね。数は少ないですがスペイン語表記も使いましたから、104、105の文字化けはそれが原因でなかったことはハッキリしています。こうなるとやはり、この二週分だけが何故化けたのか分かりません。

新たに取得したヤフーとホットメールの自分のアドレス宛にも送ってチェックしましたが、ウェブ上で全文を見たのは初めてだったので些かビックリ、ガッカリでした。なるほど、文字化けこそしてはいなかったものの、書体やサイズが変わってしまっていて、写真に対して各行の折り返しが極端に短くなっていました。写真の横に文字が回りこんでしまっていた箇所もありました。

ウェブ・メールをお使いの皆さんは若い世代の方が多いので気にもならないでしょうが、読むのに難渋するくらい小さい文字になっていますね。しかも、OEでは可能な、メニューバーの「表示」で文字サイズを変える、ということも出来ないみたいですから、そのまま読むしかないのでしょう。

OEをお使いの皆さんはご承知ですが、フォントはMS明朝12ポイントで、一行が38文字、丁度写真の横幅600ピクセルにほぼ一致しています。プリントして読む方のために、A4判に程良く収まるようにしているのです。

また、画像が添付ファイルになってしまうという方のために画像のファイル名を写真の左肩につけましたが、添付ファイルの番号は変わってしまっていました。結局、これも何の役にも立たなかったわけです。なぜそんなことになるんでしょう？

いずれにしてもこの「手紙」は、何か重要なことをお伝えするようなものではありませんから、どうでもいいと言えばドウでもいいことなのですが、ウェブ・メールの画面には些かウンザリしました。ウェブ・メールはどこのPCを使ってでも簡単にメール・チェックが出来るという利点はあるのですが・・・。ウン・・・。

当面「ユニコードで送信」は絶対に避けること、位しか対策を思い当たりません。文字化けした時の善後策も添付ファイルとして再送するしかありません。とりあえず文字化け、または、写真が文中に挿入されていない等の場合はお知らせください。大部分の方には関係ないことなので、この件に関してはこれで打ち切りとします。

*

*

*

「浜の夏支度」の巻

カァデイスの浜に夏が来た、のはもう一ヶ月以上前のこと。けれども、これまでのところ人がドッと繰り出すのは土日に限られていました。これだけでは浜での商売も採算が取れるところまでには至らず、冬の浜とわずかに違いがあるのは市が手配したボードウォーク設置とシャワー、足洗い場の整備しかありませんでした。

*



5月末の或る日、浜をこんなものが走っていました。浜の夏のハダカンボウ相手の商売、チリングート(chiringuito)の开店準備です。冬の間どこかの倉庫に眠っていたものを引っ張り出して来たんですね。これを皮切りに浜のあちこちで建設ラッシュです。それも先週末には一段落、いっせいに开店しました。

チリングートとは浜辺の売店・屋台といったようなものですが、安直なものは冷たい飲み物・お菓子・アイスクリーム等の売店、凝ったものは魚介料理中心の海浜レストラン的なものまで規模も色々です。こんな風にクレーンで吊り上げてちょこんと置くだけってのは売店ですね。

大きな、レストラン的なものは2～30卓規模のもあって、そういうところでは一応大工さんが入っての仕事になります。テーブルはパラソルをたてて砂の上にじか置

き、又はボードの上。カアディスの浜では屋内で食べるような店は出店しません。その辺が外国人観光客の多いコスタ・デル・ソルの海岸と違うところ。

*

元々、カアディスの浜のお客は殆どが地元か近隣の内陸の町の人らしい。だから、浜へ来るのは食事をするためにではなく、海水浴に来るのが主で、本格レストランでは逆に客の入りは悪いのでしょうか。遊歩道上には周年営業の本格レストランもいくつかありますから、白いテーブルクロスで食べたい人はソッチに行けばいいんですね。

私達は目の前が浜なんだからワザワザ其処へ食べに行く必要はありません。ウチのペランダのほうが涼しく快適、且つ清潔、ビノだってセルベサだって自分好みの銘柄がある、しかも安い、だからこの浜のチリングートには入ったことはありません。

チリングートは道路上の屋台と違って電気・水道も引いてあるし、トイレも別棟に完備なんですけど、スペインの安手の食べ物屋がすべてソウであるように、決して清潔とは言いがたい。潔癖な人にはどうにも我慢ならないところもあるでしょう。まあ、諸事万端日本のような清潔度はあんまり期待できないでしょうね。

*



先週、浜にこんなものができていました。そのうち大工さんが出てきて、作業再開。彼らはボカディーヨ(bocadillo=フランスパン・サンド=朝食代わり)に行っていたんですね。作業現場や学校は午前11時前後には時計は止まったも同然。朝食です。



去年、棕櫚のパラソルが立ててあった車椅子用の休憩所を憶えていますか？
 今年はこの通りもっと本格的な休養施設を作るらしい。鉄骨のように見えた骨組みは双眼鏡でよく見るとニス塗りの木材でした。使用資材にも配慮されていることが窺われます。社労党政権になってからこういう施設の整備が充実しつつあるような気がします。さて、どんなものが出来上がるか？

これまで、スペインのお役所を初め公共交通機関や施設などの案内表示の少なさに、何度もイチャモンをつけてきましたが、最近になって、そういうものも多少改善されつつあることを感じます。少なくともカアディスではその傾向になりつつあることは確かなところでしょう。

全てが革新政権の故とは言いませんが、私達が移住してきた4年前と現在を較べるとはっきりその変化を感じ取れるのです。政権交代は3年前爆弾テロのあった年からですから、無関係ではないような気がします。それとも遅ればせにEU加盟の効果が現れ始めたということか？

*

*

また、ある日、目の前の海にこんな船がやってきました。遊泳範囲を示すブイを入れる作業船です。大きな船の船首部分に黄色いものが見えるでしょう？これがそのブイで、右舷船首に接舷している小さいボートで波打ち際から一定の距離にブイを入れて行きます。一抱え位の大きさのプラスチックのブイにステンレス・チェーンをつ

けてその先にヤハリ一抱え位あるコンクリート製のアンカーが付いています。



チェーンは、満潮時でも、大きなうねりが来ても、ブイがアンカーに引っ張られて水面下に沈んでしまわないよう充分の長さにしてあります。だから風の干潮時には逆に

長すぎてアンカーの真上からは大きくずれることになります。このことは航海用のブイにも言えることでブイの位置には必然的に或る程度の誤差があるものです。だから海底の障害物を表示するブイに船が極端に接近するのは危険。じゃ、どーする？ 潮の干満差以上に充分離して通過、が正解。アッターメーだよ。



渚から沖に向かって黄色のブイが二列並んでいて、その先端に緑と赤のブイを入れているのが分かりますか？ これは救難ボートが出入りする通路。 緑と赤のブイを結んだ延長線上、写真の右端にある黄色のブイが遊泳範囲の限界を示すもの。

*

このブイは海水浴客が集中する浜の長さ約4.5キロにわたって100メートルおき位にズーっと連続で入れてあります。実際にこのブイの向うまで泳いでいきそうな人を見たことはありません。

殆どの方は背が立つところでバシャバシャやっっているのがオチです。オバサン達がよくやっっているのは、腰か胸位の深さまで入って行って波が来るたびにぴよんぴよんと垂直飛びして遊ぶこと。かなりの人数の人がそうして遊んでいます。地上では垂直飛びなんかトテモ出来そうもない体型の人でも、水中でなら浮力に助けられて飛び上がれるから嬉しいのでしょうね。

街を歩いていると中年以降のオバサン達でヨチヨチ歩きしか出来ないような人たちが異常に多いことに気が付きます。食生活の質とか、食べ過ぎとか、運動不足だとか言うこととは関係なくそうなってしまっているような感じをうけます。親子代々の遺伝的体質になってしまっているのしか思えない。

しかし、本当に深刻な問題はそれが若年層にまで広がりつつあるということ。

病的な肥満はスペインだけでなく近年はどここの国にでもある現象でしょうが、この国のレベルは日本のそれとは比較にならぬほどだと思います。

話は飛びますが、この国の子育てについて甚だ奇ッ怪な光景を度々目にしています。小学校の登下校時間になると学校の回りは父兄で一杯になります。登校時も下校時もランドセル代わりのローラーつきリュックを親が引いて子供に付き添っています。オボッチャマ、オジョウチャマの通う有名私立校ならイザ知らず、見たところクソガキそのものみたいな五体満足な腕白坊主、しかも日本なら小学校高学年相当の子供をまでそうやって送り届け、迎えにも行くんですね。

登下校が特に危険な区域だとか、校区がトテモ広くて徒歩登校には無理があるとかならまだしも、ゴク普通の安全な場所にある学校の回りでもそうなのです。これがどうにも理解できません。子供をこんなに甘やかしちゃっていいものでしょうか。

私達が知る限りアンダルシアの町々ではいずれも殆ど同じ状態です。まさか昔からこんな風だったわけではないでしょうね。最近の少子化で子供を大事にし過ぎになってしまったんじゃないか、と思いますがどうでしょう。

nなんかは小学校1～2年の時はランドセル背負って(元気ヨク、かどうかは知りませんが)片道約45分歩いて通ったもんです。勿論親が付き添いななんて事はありません。だからドウだというもんじゃないけれど、スペインの現状は決して感心できるものではないと思いますけどねー。

この子供達が親になる頃、スペインがドウ変わっていくか見ものです。

モウ一つ、やはり学校周辺での光景。午前11時頃になると各学校の周辺はパンを齧っている生徒で一杯になります。この場合は年代は日本の中学校以上でしょう。なぜそういうことになるかという、普通の家庭では朝起きてから家を出るまでに殆ど朝食らしいものを食べないらしい。ファン・カルロスもそうだと行ってました。だから、11時頃には授業はいったん休憩で、全校生徒が校外に出て近所の食品店に殺到するんです。そしてボカディーヨを作ってもらってそれにパクつくわけ。

これは子供に限らず職場でも似たり寄ったりらしい。

中には明らかに自宅で母親か自分が作ったらしいもの(これはアルミ・フォイルなどでくるのであるので分かります)を食べている子もいますが、内容はみな同じようなもの。大きいパンを二つ割にしてハモンやサラミやケソ(チーズ)を挟んだだけ。野菜っ気は全くありません。

小学校ではどうしてるのか知りませんが、同じ時間帯に小学校の校庭でボカディーヨやお菓子の袋を持っているのを目撃していますから、近所の店に買いには行かず、親が持たせたものを校内で食べているのかも知れません。

*

またこれらのボカディーヨが恐ろしいシロモノで、私達が遠足のオベントに持ってゆくミニ・クロワッサン・サンドなんかこの中高生が食べているものに較べたらハクソみたいなもんです。こんなものを登校日や出勤日に毎朝食べていれば体にイイわけないですね。それがこの国の食文化だ、と言うなら、では最近社会問題化しつつある若年層の病的肥満はドウだと言うのか。

こんなだからこの国でも一部では日本食ブームになりつつあるらしい。けれどもまた、その日本食たるや甚だ怪しいもの。高いばかりで我々日本人の味覚ではクビを傾げたくなくなるような似非日本食が多いはずで。

*

さて、話を戻しましょう。浜に夏だけ登場するのがモウ一つ、物売りです。広い砂浜の上、を太いタイヤが付いたカートに冷たい飲み物などを載せて売り歩く人はかなりの人数です。人別をして数えたわけではありませんが、最盛期には20人は軽く超えるのではないのでしょうか。どうやら元締めがいくつああって、夫々のグループは言わば商売敵らしい。多分多くはモロッコ人シンジケートなのだと思います。



ウチの前に止めたこの白いバンがその元締めの一つ。遊歩道の上で赤や白のキャップをかぶった売り子が商品の用意をしています。一人は女性ですね。真ん中の手を腰に当てているでっぷりしたオヤジがテキ屋の親分でしょう。双眼鏡で覗いてみると、いかにもそれらしい、物騒な面構えです。お友達にはなりたくない感じ。

多分、夫々の売り子は元締めから商品を貰って売り歩き、売り上げの何パーセントかの歩合を貰うのでしょう。売り子はみな商売熱心で、広いカンカン照りの浜を大きな声をあげて売り歩きます。セルベーター・アーグワ・ファンタ・コカコーラ！！

商品はクーラーに氷詰めにした水物が多いですから重量も大したもので、大変な労働です。だから売り子は皆スリムで、親分のようにでっぷりした奴はいません。肥満に悩みつつボカディーヨにぱくつくデブ高校生にやらしてみたい。私達もこのところ15～6キロの荷物をカートに載せて4キロ離れた郵便局まで押してゆきます

が私達の歩くところは砂浜ではなく遊歩道ですからダイエットにはなりません。



先週日曜日の人出。今週末、学校の夏休みに入ると一気にこの倍にはなるでしょう。

「コパ・ムンディアル」の巻

ワールド・カップ見てますか？ スペイン語で正しくは **Copa Mundial 2006** ですが普通は **Mundial 2006** と言っていることが多いようです。14日までに出場32チームの顔ぶれが全て出揃ったわけですが、勿論、私達は全試合を見ました。

一番印象に残ったのはやはりなんと言ってもスペイン・チームの快勝。これまでの各国との親善試合で感じた心許なさを吹き飛ばしてくれる、いい勝ち方でした。特にプジョール(Puyol)の活躍は素晴らしい。DFでは勿論一番頼りになる選手なのに、更にもその上ゴール前まで駆け込んでトレス(F.Torres)をアシストして快心のシュートを決めさせてしまうんだから凄い。アナウンサーもミラ・ミラ・ミラ・ミラ・ミラと大興奮。このゲームは興奮が直に伝わるスペイン語放送で見て良かったとつくづく思いました。(ミラ mira とは look! 見て! 見て! 見て! です)

守りに徹したカリブの小国トリニダード・トバゴも面白かった。スウェーデン相手にゼロゼロの引き分け。徹底的に守りに守って一瞬のチャンスを狙う戦いぶりは前回

のオリンピックで優勝したギリシャを思い出させるものでした。特に印象的だったのは両方の観客席。トリニダードのほうはまるで優勝したかのような大喜び。スウェーデンは予選落ちが決まったかのような落胆振りのお通夜状態。2試合目の対イングランドも相手をウンザリさせる粘りの守り。惜しくも終了間際に崩れて敗戦。

その他では、同じく引き分けに終わったフランスの不調。名手ジダンの花道を飾るはずの彼の最後のワールド・カップなのに、味方選手同士のイガミ合いまで見えてしまっってちょっとガッカリしました。これではジダンがかわいそうな気がします。

日本やブラジルにはあえて触れずまい。これまででは最高の勝ち方をしたスペインでさえ逞しい欧州の列強の中では弱々しく感じられるんですから、カスッただけでバツたばったと倒れるような日本選手は見たくない、というのが正直な印象です。残る試合は勝敗抜きで、選手自身「楽しんで」プレーしてもらいたいと思います。
